



K. Takahashi · H. Arakawa 編
**Climates of Southern
 and Western Asia**

(World Survey of Climatology
 Vol. 9)

Elsevier Scientific Publishing Company, 1981, A 4 判,
 333頁, Dfl. 250.00

H.E. Landsberg が Editor in Chief の本シリーズも 1981年に本巻と第3巻が4年ぶりに刊行され15巻のうち13巻がそろった。残るは第1巻と第15巻である。本巻と対になるべき北東アジアはシリーズの開始された1969年に出ているが、当時と比べると、気候(学)のイメージはずいぶん変化した。一方、スリランカ、バングラデシュ、ホーチミン市といった国名、地名も当時は無かった。

ところが、本巻を含め本シリーズの大部分を占める地域別気候誌の内容は10年やそこらで変化するはずはない。またこの10年余の間にグローバルな気候に関する議論は、大循環気候モデルによる気候のシミュレーションが可能になったり、FGGE があったりして、かなり深まったとはいえ、地域別気候誌の書き方が根本的に変化する状態にはなっていない。

本書の構成は、第1章; S. Nieuwolt による東南アジア(大陸部)、第2章; Y.P. Rao によるインド亜大陸、第3章; M.F. Taha 他3名による南西アジア、の地域別、国別気候誌と第4章の K.N. Rao によるインド洋の熱帯低気圧の4章よりなっている。各章本文とはほぼ同じ頁数を使って気候表、気候図が付いている。

東南アジア(大陸部)とは、マレーシア、シンガポール、ビルマ、タイ、インドシナ3国のことである。この地域全体を支配するモンスーン活動を軸に季節の特徴を述べたあと、緯度、海岸からの距離、地形等、全体的特徴に地域的な差をもたらす要因に関する記述がなされ気候区分までなされている。

インド亜大陸の記述は、この地域の自然的概観、季節の区分から始まる。後者から以下の説明の時間的分解能が決まる。すなわち、海面気圧、風、日平均気温等の月平均値分布図を、1, 4, 7, 10の4カ月について示したり、季節別の降水量分布図を示したりする。雷雨、雹に関する記述のあと唐突にヒマラヤの気候という節があり、以下、モンスーンの開始と終了、総観規模擾乱系、

日射量分布、蒸発散量分布、気候区分が対象地域全体について記述されている。

南西アジアの章は、トルコ、イラン、キプロス、イラク、クウェイト、シリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、サウディアラビア、イエーメン、南イエーメンの12ヶ国を取り上げる。はじめに、全域の地形、ケッペンの方法による気候区分、気団、季節別の総観規模擾乱系の説明がなされ、次に国別の気候誌となる。後者の書式は、地形、気候区分の一般的な記述と、気温、湿度、雨、雪、地表風等の気候要素別の記述からなる。国により取り上げる項目は若干異なり、各国に割り当てられた頁数は2~5頁程度である。

インド洋の熱帯低気圧については、それに関するいくつかの集計結果が示され、若干の説明がなされる。この章の設定は前3章と異なる観点でなされているにもかかわらず、読んで受ける印象はあまり違わないのは不思議といえは不思議でもある。

第1~3章の地域別、国別気候誌の書き方は当然のことながら執筆者により異なり、それぞれに苦勞の跡が見られなくもない。気候誌記述の目的が、与えられた地域についてその気候を読者に知らせることであり、それ以上の具体的目標(たとえば、農業生産の制限因子としての気候の把握など)が無ければ、気候という言葉に何を意味させようとするのか人により考え方が異なっている今日、書き方が異なるのは当然である。かえって第3章のように、国が違っても同じ項目がならんでいるほうが異様な感じを受ける。

しかしながら、地域別、国別気候誌についてはより重要な問題がある。すなわち、自然地域として気候(学的)に閉じさせることがあまり無理でない場合(たとえば島国)を除き人為的国境、行政区画により決定された領域の気候を論ずるのは無理がある。国境によって気候が異なることは原則としてあり得ない。唯一の例外になるかもしれないのは、シナイ半島のイスラエル、エジプトの国境線(現時点で何と呼ぶべきかは知らない)である。ランドサットの写真でこれに沿って植生が異なるのが既に見えるのであるから当然気候も違っているであろう。

国別の気候誌を全球的にコンパイルしても地球の気候を説明できたことにはならないけれども、地球の気候を理解するには任意の地域の気候を説明できなければならないことも明らかである。ところが、そのつもりで気(850頁に続く)

(参考資料2)

国際地球観測事業関係勧告, 要望, 申入れ一覧表

施行年月日	件名	議決された会議
昭和 29. 5. 1	国際地球観測年の実施について (要望)	第17回総会
30. 9. 29	国際地球観測年における南極地域観測への参加について (要望)	第99回運審
33. 4. 24	南極地域観測事業の継続について (要望)	第26回総会
35. 5. 18	南極地域観測事業について (勧告)	第31回総会
36. 12. 6	宇宙空間科学研究の振興について (勧告)	第35回総会
37. 5. 15	南極地域観測の再開について (勧告)	第36回総会
37. 5. 18	太陽極小期国際観測年の実施について (勧告)	第36回総会
37. 5. 23	国際地球内部開発計画の実施について (勧告)	第36回総会
38. 4. 26	南極地域観測事業の再開問題について (申入れ)	第39回総会
42. 5. 10	地球大気開発計画の実施について (勧告)	第48回総会
42. 8. 22	国際地球内部開発計画による日ソ共同研究について (要望)	第313回運審
43. 5. 23	太陽活動期国際観測年 (IASY) の実施について (勧告)	第50回総会
46. 5. 1	国際地球内部ダイナミック計画 (GDP) の実施について (勧告)	第58回総会
46. 5. 26	南極地域観測について (申入れ)	第58回総会
48. 11. 15	国際磁気圏観測計画 (IMS) の実施について (勧告)	第64回総会
49. 5. 20	国際海洋研究10ヶ年計画 (IDOE) の実施について (勧告)	第65回総会
53. 11. 18	中層大気国際協同観測計画 (MAP) の実施について (勧告)	第76回総会
56. 11. 4	国際リソスフェア探査開発計画 (DELP) の実施について (勧告)	第83回総会

(848頁より続く)

候誌を読んでもその要求は一般には満たされない。気候表, 気候図を解釈するための1つの手懸りを得られれば多とすべきであろう。それにしても本巻でアフガニス

タンが抜けざるを得なかったことは, 価格 (Dfl. 250.00, 約32,500円) とともに大きな欠点となってしまう。

(田宮兵衛)